

〔論文〕

エミリ・ディキンソンの 「美しい不在者」

佐藤江里子

- 〈目次〉
1. はじめに
 2. 野に咲く「一輪の花」
 3. 「美しい不在者」
 4. おわりに

1. はじめに

Perhaps you laugh at me! Perhaps the whole United States are laughing at me too! I can't stop for that. My business is to love. (L269 to Dr. and Mrs. J. G. Holland, Summer 1862)

多分あなたは私のことを笑うでしょう！ひょっとしたら合衆国中も笑っているでしょう！私はそれをやめることはできないのです。私の仕事は愛すること。(L269, ホランド夫妻への手紙, 1862年夏)

エミリ・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) は親しい友人に宛てた手紙⁽¹⁾の中で、「私の仕事は愛すること」(“My business is to love”)と述べている。「愛すること」はディキンソンの作品と人生の大きなテーマである。その「愛」の対象は、「自然」「神」「家族」「友人」「恋人」「芸術」そして「詩をかくこと」である。ディキンソンは生まれ育ったニューイングランド地方アマストの自然を愛し、その中でも野生の植物や屋敷の庭に咲く花に想いを寄せ、それらは詩人にインスピレーションを与えた。

「愛」と「自然」をテーマとした数多くの作品(詩と手紙)の中から、花のイメージリーにあふれた「あなたのために私の花を育てる」(“I tend my flowers for thee” F367 / J339)を中心に、北米の他の詩人たちの花をモチーフとした作品と比較しながら、様々な「花」のメタファー(比喩)を分析し、エミリ・ディキンソンの「美しい不在者」(“Bright Absentee”)について考察する。

2. 野に咲く「一輪の花」

ディキンソンは1830年マサチューセッツ州アマストで生まれた19世紀の詩人である。その約80年前、1752年ニューヨーク州ニューヨークに生まれたフ

イリップ・フレノー (Philip Freneau, 1752-1832) は、のちに第3代アメリカ大統領となるトマス・ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743-1826)⁽²⁾ が提唱したジェファソンの民主主義を擁護し、「独立革命の詩人」と呼ばれた。革命中の実体験をうたう詩を数多く残しているフレノーが、直接的な戦いのイメージではなく、北米詩人たちの原風景のような自然詩を残している。アメリカロマン派の源流と言える次の詩で、フレノーは野に咲く「一輪の花」, 「ハニーサックル」 (“honey suckle”)⁽³⁾ に人間の生と死を重ねている。

The wild honey suckle

Fair flower, that dost so comely grow,
 Hid in this silent, dull retreat,
 Untouched thy honied blossoms blow,
 Unseen thy little branches greet :
 No roving foot shall crush thee here,
 No busy hand provoke a tear.

By Nature's self in white arrayed,
 She bade thee shun the vulgar eye,
 And planted here the guardian shade,
 And sent soft waters murmuring by ;
 Thus quietly thy summer goes,
 Thy days declining to repose.

Smit with those charms, that must decay,
 I grieve to see your future doom ;
 They died—nor were those flowers more gay,
 The flowers that did in Eden bloom ;
 Unpitying frosts, and Autumn's power
 Shall leave no vestige of this flower.

From morning suns and evening dews
 At first thy little being came :
 If nothing once, you nothing lose,
 For when you die you are the same ;
 The space between, is but an hour,
 The frail duration of a flower.⁽⁴⁾

野生のハニーサックル

汚れなき花、それはとても美しく育つ
 この静かで曇り空におおわれた人目につかない場所にかくれて
 あなたの蜜のように甘い花は 触れられることもなく風に揺らめき
 あなたの小さな枝は 見られることもないのに挨拶をする
 ここではさまよう足があなたを踏みつけることも
 忙しい手があなたを摘み取ったせいで泣くこともないだろう

自然によって白い衣装を身にまとい
 自然はあなたに粗野な目を避けるように命じた
 あなたの守護者がここにかくれ家を作った
 そのそばにはさらさらと音をたてる水の流れを送った
 そんなふうに静かにあなたの夏は過ぎ
 あなたの日々は永遠の眠りへと沈んでゆく

その魅力で打ちのめされてしまう、だがそれはいつか消えるときが来る
 私はこれから訪れるあなたの死の運命を思い知らされ悲しみにくれる
 その花は滅びた—あなたより鮮やかではなかった
 それはエデンに咲いた花だった
 無慈悲な霜、そして秋の権力が
 この花の名残をすべて消してしまうだろう

毎朝昇る太陽と夕暮れとともに降りる露から
 最初にあなたの小さないのちが生まれた

もともと何もなかったから、あなたは何も失わない
 あなたが死ぬとき、前と同じになるのだから
 あいだにあるへだたり、それは刹那
 一輪の花のはかない時間

「静かで曇り空におおわれた人目につかない場所にかくれて」「美しく育つ」「汚れなき花」、この「ハニーサックル」は「触れられることもなく」「見られることもない」が、人間たちの「さまよう足」が「踏みつけること」も、「忙しい手」がその花を「摘み取ったせいで泣くこともない」と言う。ここには自然の中で、他者に侵されることのない絶対的な個の自由と尊厳がある。これはフレノーが賛同したジェファソンの民主主義の原則、「すべての人間は平等につくられている、人間は神によって譲渡されえない権利を与えられている、人間には生命と自由と幸福の追求がある」を反映している。⁽⁵⁾ また、個の自由を尊重し、農本社会を理想としたジェファソンの思想は、革命時代の政治的理念であると同時にアメリカのロマン主義という文学的な土壌を築いた。第1連の自然の法則に従い、自然の中で自立して咲く一輪の「汚れなき花」、この詩のタイトルでもある「ハニーサックル」は、革命の詩人と呼ばれたフレノーが、独立前のアメリカの理想を投影した象徴的な花である。

第2連の「自然」(“Naure”)は、その花に「白」を着せ、人目につかないよう「かくれ家」を作り、花のそばには「水の流れ」を与えた。花の色を決めた「自然」の背後には「守護者」が暗示する「神」がいる。だが、第2連の5、6行目では、「そんなふうに静かにあなたの夏は過ぎ／あなたの日々は永遠の眠りへと沈んでゆく」と言い、ここから語り手である「私」の視点は夏に咲く「ハニーサックル」の「日々」と残された時間に向けられる。「夏」は「生」が最も輝く時、つまり人生の最盛期、そして「永遠の眠り」は「死」を暗示する。

エミリー・ディキンソンにおいても、「夏」は特別な意味を持つ。過ぎゆく日々の中で巡りくるひとつの季節として「夏」を描くだけでなく、「夏」は

様々なメタファーとなる。北緯42度、北米アマストの冬が厳しく長い分、短い夏が輝いていたことはディキンソンの夏をテーマやモチーフとする多くの作品に反映されている。フレノーと同様にディキンソンも「夏」を「生」が最も輝く人生の最盛期ととらえていた。「悲しみのようにいつのまにか」(As imperceptibly as Grief F935 / J1540)では、喜びに満ちた「夏」が過ぎ去ったことに気づいた詩人の「悲しみ」を描いている。ここでは最盛期としての「夏」やその美しさではなく、「過ぎ去った」「夏」、つまり「夏」の不在をうたう。この詩の後半13~16行目「このように、翼もなく／あるいは船もなく／夏はかるやかに去ってしまった／美の中へと」(“And thus, without a Wing / Or service of a Keel / Our Summer made her light escape / Into the Beautiful—”)は、フレノーの「野生のハニーサックル」の第2連の5、6行目「そんなふうにあなたの夏は過ぎ／あなたの日々は永遠の眠りへと沈んでゆく」(“Thus quietly thy summer goes, / Thy days declining to repose.”)とイメージ上の共通点がある。

だが、ディキンソンの場合、「夏」が「去ってしまった」のは「美」(“the beautiful”)であるのに対し、フレノーが描く「ハニーサックル」の「夏」は「死」を連想する「永遠の眠りへと沈んでゆく」だけである。ディキンソンの「夏」がその中に消えた「美」には、季節における永遠の循環が暗示されているが、フレノーにおいては、第3連の「ハニーサックル」は「いつか消えるときが来る」, 「これから訪れるあなたの死の運命」(“your future doom”)という明確な「死」への言及があり、最後まで「再生」の可能性は示されない。

更に「エデンに咲いた花」(“The flowers that did in Eden bloom”)と比較し、「その花」は「あなたより鮮やかではなかった」と「ハニーサックル」の美しさやその魅力を称賛する。しかし、不滅であるはずの「エデン」の「花」さえも「滅びた」(“died”), 「無慈悲な霜」(“Unpitying frosts”), 「秋の権力」(“Autumn’s power”)など擬人化された「霜」や「秋」は、死神のイメージで「花の名残」(“vestige of this flower”), つまり「ハニーサックル」

の「生」の痕跡を消し去る。

最終連の第4連では、生まれてから死ぬまでの与えられた期間を「あいだにあるへだたり、それは刹那／一輪の花のはかない時間」と表現し、「ハニーサックル」の「生」を「時間」と「空間」でとらえている。さらに「一輪の花のはかない時間」は、人間の「生」を暗示している。ここで特に注目すべき点は、「もともと何もなかったから、あなたは何も失わない／あなたが死ぬとき、前と同じになるのだから」に見られる、無から生まれた「いのち」は無に還るだけであるというフレノーの思想である。

フレノーは、18世紀から19世紀の初めに活躍したが、17世紀アメリカ最初の詩人であるアン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet, 1612-72) やエドワード・テイラー (Edward Taylor, 1642-1729) は、典型的なピューリタン詩人であり、神への愛や忠誠を主要なテーマとしている。人々の信仰心を取り戻そうとして大覚醒運動などが起きているが、フレノーが生きた時代はまだ、ピューリタニズムの教義が人々に与える影響は大きかったと言える。しかし、この第4連には選ばれた人々の復活も永遠の生命も表出していない。フレノーの意識は死後の永生ではなく、すべて無に還る「死」に向いている。この点に関しては、神の存在が揺らぎ始めた19世紀、神の姿が見えなくなってしまった20世紀の感覚を先取りしている。「ハニーサックル」の姿を通して、生きているものに与えられた「死」の苦悩と限りある「生」を「一輪の花のはかない時間」としてとらえている。

フレノーの「野生のハニーサックル」の第1連と第2連の描写やイメージは、19世紀アメリカン・ルネサンスの中心人物、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の「ロドーラ」(‘Rhodora’) の冒頭1～4行目を想起させる。「五月、海風が私たちの荒野を吹き抜けるとき／私は森で咲いたばかりのロドーラの花を見つけた／湿っぽく人目につかない場所で葉のない花を広げながら／その見捨てられた場所やゆるやかに流れる小川を喜ばせている」(“In May, when sea-winds pierced our solitudes, / I found the fresh Rhodora in the woods / Spreading its leafless in a dump nook, / To please

the desert and sluggish brook.”). この詩の語り手である「私」が「森」の中の「湿っぽく人目につかない場所」で人知れず咲く「ロドーラの花」を見つ⁽⁷⁾ける。これは、フレノーの「静かで曇り空におおわれた人目につかない場所にかくれて」「美しく育つ」「ハニーサックル」の描写やイメージと重なる。

だが、エマソンは、自ら提唱した超絶主義の「自己信頼」から生まれた「ロドーラ」の生命力と存在そのものに備わる「美」をこの詩のテーマとする。ここに死の影は見られない。それとは対照的にフレノーの「ハニーサックル」は、「エデン」の「花」よりも美しいにもかかわらず、第2連の後半から最後まで、「死の運命」がつきまとう。ここにフレノーとエマソンの決定的な相違点があるが、自然の中に咲く「一輪の花」は、北米の詩人たちにおいてはアメリカの「個」を尊重する理念と、開拓前のアメリカの自然に基づく自己の経験、つまり理想と現実から生まれた一つの原風景となる。

3. 「美しい不在者」

ディキンソンは詩の中で、多種多様な花をモチーフやテーマとして描いている。詩だけではなく手紙でも植物への言及が多く見られる。アマスト・アカデミー時代の友人に宛てた手紙では次のように述べている。

I have been to walk to—night, and got some very choice wild flowers. I wish you had some of them… My plants look finely now. I’m going to send you a little geranium leaf in this letter, which you must press for me? (L6⁽⁸⁾ to Abiah Root, 7 May 1845)

今夜、私は散歩して、選りすぐりの野生の花たちを摘んできました。何本かあなたにもあげられたらいいのに。…私の草花たちは今、生き生きしています。小さなゼラニウムの葉っぱをこの手紙に入れてあなたに送ります。この手紙に小さなテンジクアオイの葉を入れてあなたに送るつもりです。きっとあなたはそれを私のために押し葉にしてくれますよね？ (L6, アバイ

ア・ルートへの手紙, 1845年5月7日)

ディキンソンは植物への興味が非常に深く、知識も豊富だった。そして学問として学ぶだけではなく、アバイアへの手紙にあるようにアマストの自然の中で、実際に野に咲く花を摘み、屋敷の庭で花を育てることもあった。

次の詩では、語り手は「ミツバチ」が「芳しい香り」を集める「私の庭」で、「あなた」のために「私の花」を育てる。

I tend my flowers for thee—
Bright Absentee!
My Fuschzia's Coral Seams
Rip—while the Sower—dreams—

Geraniums—tint—and spot—
Low Daisies—dot—
My Cactus—splits her Beard
To show her throat—

Carnations—tip—their spice—
And Bees—pick up—
A Hyacinth—I hid—
Puts out a Ruffled Head—
And orders fall
From flasks—so small—
You marvel how they held—

Globe Roses—break their satin flake—
Opon my Garden floor—
Yet—thou—not there—
I had as life they bore
No crimson—more—

Thy flower—be gay—
 Her Lord—away!
 It ill becometh me—
 I'll dwell in Calyx—Gray—
 How modestly—always—
 Thy Daisy—
 Draped for thee! (F367 / J339)

あなたのために私の花を育てる—
 美しい不在者！
 フクシアの珊瑚色の縫い目は
 裂ける—種をまく人が—夢を見ているあいだに—

ゼラニウムが—ほのかに色づき—目印となる—
 背が低いデイジーは—点々と咲く—
 私のサボテンは—そのあごひげを縦に裂き
 自分ののどを見せる—

カーネーションが—その芳しい香りを—放つと—
 ミツバチが—集める—
 私が隠した—ヒヤシンスは—
 ひだ飾りのついた頭を出し—
 香りが降りそそぐ
 とても小さい—花びらの入れ物の中から—
 あなたが驚嘆するほどに—

グローブローズは—その^{サテン}縞子の花びらを—
 私の庭に散らす—
 でも—あなたは—そこにいない—
 グローブローズが生み出す命のような
 深紅を私は持っていなかった—もうこれ以上—

あなたの花は—色鮮やかに咲くだろう—
 主人が—いないあいに！
 私はそんなふうには咲くことはない—
 私は^{がく}の^{がく}の中に住むつもりだ—灰色の—
 なんと控えめに—いつも—
 あなたのデイジーは—
 あなたのためにドレスを身にまとったのか！

ディキンソンにおいては比較的長く、1連の行数も変則的なこの詩の中で、第1連「フクシア」(“Fuschzia’s”⁽⁹⁾)、第2連「ゼラニウム」(“Geraniums”), 「デイジー」(“Daisies”), 「サボテン」(“Cactus”), 第3連「カーネーション」(“Carnations”), 「ヒヤシンス」(“Hyacinth”), 第4連「グローブローズ」(“Globe Roses”), そして最終連の第5連では「デイジー」(“Daisy”)など、「私の庭」(“my Garden”)に咲く様々な花が列挙されている。これは、同時代のアメリカの詩人ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman, 1819-1892)の特徴的な詩的手法であるカタログを想起させる。ホイットマンは多様な物事を羅列するが、ディキンソンの場合は、「私のサボテンは—そのあごひげを縦に裂き／自分ののどを見せる」や「私が隠した—ヒヤシンスは—／ひだ飾りのついた頭を出し—／香りが降りそそぐ」など「私の庭」の植物を擬人化⁽¹⁰⁾する。

第1連「フクシア」の「珊瑚色」、第2連「ゼラニウム」が「ほのかに色づき」、第3連「カーネーション」の「芳しい香り」、ヒヤシンス」の「香り」、第4連の「グローブローズ」の「深紅」、第5連の「^{がく}の^{がく}」の「灰色」のように様々な花とその色彩や芳香のイメージが広がる言葉を選んでいる。ディキンソンは、擬人法を使い植物を生き生きと描いているだけでなく、作品に彩りと香りを与えている。

この詩は、読み手の視覚や臭覚に訴える独創的な植物図鑑のように展開している。また、「デイジー」(“Daisies”) (“Daisy”)以外の花は、ディキンソンの詩の中で、この詩のみに1回、または他の詩を含めて2回と限定的に使

われている。⁽¹¹⁾特に、第3連では、「ゆっくり来て—エデン！」(Come slowly—Eden! F205 / J211)と同様に、「花」と「香り」と共に歓喜を象徴する「ミツバチ」が登場することにより、「あなたのために私の花を育てる」「私の庭」は「エデン」となる。ジュディス・ファー (Judith Farr) は F367の詩について次のように述べている。

As the iambic/ trochaic rhythm of the poem becomes livelier, the most fragrant and sensual flowers—hyacinths, roses—shed their scents flirtatiously. The satiny roses even fall apart, symbols of love denied. Interestingly, hyacinths flower in the poem together with roses, yet roses bloom in June and hyacinths, in early spring. Fuchsias begin to drop off in July, but in the poem, each of these flowers from different seasons blossoms and declines together. Thus the “Garden floor” of the poem is really the poet’s mind and the poem itself, a mirror of her meditation.⁽¹²⁾

弱強格、あるいは強弱格のリズムがより生き生きしてくるにつれて、芳しい香りで官能的なほとんどの花々は—ヒヤシンスやバラのような—誘うようにその香りを放つ。健全なバラが散り、愛の象徴は否定された。興味深いことに、ヒヤシンスはこの詩の中でバラと共に咲く。だが、バラは6月に花が咲き、ヒヤシンスは早春に咲く。フクシアは7月には花が散り始める。しかし、この詩では本来は違う季節に咲くそれぞれの花が共に咲き、そして散る。従ってこの詩の「庭」は、実際には詩人の心、詩そのもの、そしディキンソンの瞑想を映し出すものである。

「エデン」である「私の庭」が、ファーが述べているように、「詩人の心、詩そのもの、そしてディキンソンの瞑想を映し出すもの」であるならば、この詩は植物学者の視点と詩人の視点で描かれた写実と空想の融合である。

ファーが「健全なバラが散り、愛の象徴は否定された」と指摘するように、第3連までは歓喜のイメージで美しい花々が生き生きと描かれているが、第4連で「グローブローズ」の「^{サテン}繻子の花びら」が散ると、翳りが見え始め、詩の調子^{トーン}が変わる。

最終連の第5連で、これまで「私の花」を育てていた庭師 (gardener) のような「私」自身が花、「あなたのデイジー」 (“Thy Daisy”) となる。「主人」 (“Lord”) である「あなた」が「いないあいだに」、私が育てた「あなたの花」は「色鮮やかに咲く」が、「私はそんなふうに咲くことはない」と言う。「灰色の」^{がく}「萼の中に住む」という表現は、花が開く前の蕾イメージである。「ドレスを身にまとった」 (“draped”) は、「デイジー」の花が開くことをたとえているが、それは「あなたの花」のように「色鮮やか」ではない。詩の中で明言していないが、それは「デイジー」の「白」である。「いつも」「控えめに」「あなたのためにドレスを身にまとった」「デイジー」は、ディキンソンが自己劇化するときに用いる重要なペルソナである。

「デイジー」はディキンソンが自己を表象する花のひとつとして、詩や手紙などに頻出する重要なモチーフ⁽¹³⁾である。手紙や断片を含め、彼女が残した膨大な作品の中で「デイジー」が登場する代表的なものは、投函されることのなかった受取人不明の3通の手紙、マスターレターズ⁽¹⁴⁾である。「美しい不在者」「主人」と「私」「デイジー」との関係は、マスターレターズの「マスター」と「デイジー」の関係を連想させる。デイジーである「私」は「マスター」に「仕事」を求められていると言う。

— who only asks— a task— [who] something to do for love of it— some little way she cannot guess to make that master glad— (L248 Master Letters 3, early 1862?)

—あの人はずただ求めるだけだ— ひとつの仕事を— その愛のためにすることだけを— あのマスターを喜ばせるための彼女が想像できないようなちょっとしたことを— (L284, マスターレター3, 1862年初め頃)

また、「大きい」「マスター」と「小さい」「デイジー」、この“big”と“small”の対比は、「デイジー」を描写するときディキンソンの認識として表出する。

A love so big it scares her, rushing among her small heart— pushing aside

the blood and leaving her faint (all) and white in the gust's arm (L248 Master Letters 3, early 1862?)

愛はとても大きいので、彼女をおびえさせ、彼女の小さい心臓に押し寄せ—その血液を押しよけ、愛が爆発した腕の中で彼女は(すっかり)気絶し蒼白になる (L284, マスターレター 3, 1862年初め頃)

「マスター」の「愛」があまりにも「大きい」ので「デイジー」は圧倒され「気絶」する。だが、この「控えめ」で「小さい」「デイジー」は「あの恐ろしい別離 (“that awful parting”) に決してひるまなかつた」とある。

Daisy—who never flinched thro' that awful parting, but held her life so tight he should not see the wound—who would have sheltered him in her childish bosom (Heart) — (L248 Master Letters 3, early 1862?)

デイジーは—あの恐ろしい別離に決してひるまなかつた、でもその生命をしっかりと抱きしめた、彼がその傷を見ることがないように—デイジーはその子供っぽい胸(心)の中に彼をしまっただろう— (L284, マスターレター 3, 1862年初め頃)

「私の人生は終わる前に二度終わった」 (“My life closed twice before it's close; F1773 / J1732) の中で、ディキンソンは「別離は私たちが天国について知っているすべて／そして地獄について必要なすべて」 (“Parting is all we know of heaven, / And all we need of hell.”) と定義している。「荒れ狂う夜—荒れ狂う夜！」 (“Wild nights—Wild nights!” F269 / J249) の「あなた」が「歓喜」の「海」, 「エデン」であると同時に、「私」という自我を取り込む「危険」な「死」の「海」であるように、「別離」には「天国」と「地獄」、両方の属性がある。だが「デイジー」は、「マスター」に取り込まれるのではなく、「その子供っぽい胸(心)の中に彼をしまつた」、つまり、「小さい」「デイジー」は、「大きい」「マスター」の「不在」を内包している。

ディキンソンが残したマスターレターズの「マスター」が誰なのか、その正体はまだ解明されていないが、この神秘的な「マスター」は、ひとりの特

定の人物ではなく、ディキンソンの身近にいた実在する人物、そして精神的な存在である神、キリストなどからなる複合的な存在であり、「マスターレターズ」の中だけに存在する幻影、永遠の不在者なのである。⁽¹⁵⁾ この「マスター」や「荒れ狂う夜—荒れ狂う夜！」(F269)の「あなた」と同様に、「あなたのために私の花を育てる」(F367)の「美しい不在者」は、今ここに「いない」「あなた」、永遠の不在者であり、そして「花を育てる」「私」の「主人」(“Lord”)、つまり「詩を創る」「詩人」の「詩神」(“Muse”)なのである。

4. おわりに

ディキンソンは、「瞬間の不在」が「永遠」のように思える人たちについてうたう。

I know lives, I could miss
Without a Misery—
Others—whose instant's wanting—
Would be Eternity—

The last—a scanty Number—
'Twould scarcely fill a Two—
The first—a Gnat's Horizon
Could easily outgrow—(F574 / J372)

私は知っている なんの苦悩もなく
その不在に気づく人たちのことを—
その瞬間の不在が—まるで永遠のように思える—
人たちもいる—

その人たちは—わずかな数—

ほとんどふたりに満たないだろう—
 最初の人たちは—羽虫が作る地平線
 それはすぐに大きくなるだろう—

「苦悩」を伴い「その不在に気づく人たち」は、「わずかな数」である。「瞬間の不在」(“instant's wanting”)が「永遠」(“Eternity”)であることを認識しなから、ディキンソンは「美しい不在者」である「あなた」のために、「私の庭」つまり、肉体ではなく魂の合一における「歓喜」や「陶酔」があり、愛の成就を果たせる「エデン」で、「私の花を育てる」。これは「あなた」という永遠の不在者のために、「私の部屋」で「詩を書く」というメタファーである。

「不在」がその「存在」をより際立たせる。ディキンソンはしばしば本質を認識するために、対立概念を用いる。

Water, is taught by thirst.
 Land—by the Oceans passed.
 Transport—by throe—
 Peace, by it's battles told—
 Love, by memorial mold—
 Birds, by the snow. (F93 / J135)

水は渇きによって教えられる
 陸は—通り過ぎた海によって
 恍惚は—苦痛によって—
 平和は語られた戦争によって—
 愛は墓石に刻まれた記録によって—
 鳥たちは雪によって教えられる

6行1連の短い詩の中で、1行目から4行目までは「水」(“Water”)と「渇き」(“thirst”), 「陸」(“Land”)と「海」(“Oceans”), 「恍惚」(“Transport”)と「苦痛」(“throe”), 「平和」(“Peace”)と「戦争」(“battles”)とそれぞれ

の対義語や一般的な対立概念を並べている。しかし、最後の2行は、詩人の極めて個人的な認識において展開している。「墓石に刻まれた記銘」(“memorial mold”)は死を象徴するものであり、ここでは愛の対立概念となる。ディキンソンにとっては「愛」と対立するものは「死」であり、それが「愛」を教える。「墓石に刻まれた記銘」は、死後の家にかけてられた表札である。それはもう現世にはいないことを示す「不在証明」(“Certificate of Absence” F503 / J996)となる。最終連の「鳥」(“Birds”)と「雪」(“snow”)は、それぞれ季節を象徴するものであり「春」と「冬」のメタファーとなる。観察者である詩人は、冬になり「雪」が降ると、「鳥」の不在を痛感する。

冒頭で引用したホランド夫妻に宛てた手紙は次のように続く。

I found a bird, this morning, down—down—on a little bush at the foot of the garden, and wherefore sing, I said, since nobody hears?

One sob in the throat, one flutter of bosom—“My business is to sing”—and away she rose! How do I know but cherubim, once, themselves, as patient, listened, and applauded her unnoticed hymn! (L269 to Dr. and Mrs. J. G. Holland, Summer 1862)

今朝、私は一羽の小鳥を見つけました、下へ—下へと降りてきて—庭の低い場所に生い茂る小さな藪の上で庭の端の、すっと—ずっと—下の小さな藪でした。そして私は言いました。なぜうたうの、誰も聴いていないのに? 一度だけのどを鳴らし、胸をふるわせて—「私の仕事はうたうこと」—小鳥は空高く舞い上がったのです! かつて誰にも気づかれなかった小鳥の讚美歌を忍耐強く聞き、それに拍手を送ったケルビム(智天使たち)をどうして知ることができるのでしょうか? (L269, ホランド夫妻への手紙, 1862年夏)

「私の仕事はうたうこと」とのどを鳴らし、空高く舞い上がる「小鳥」は、言うまでもなく詩人自身の表象である。そして誰も聴いていないのにうたう「小鳥」は、詩人として認められることはなくても生涯詩を書き続けたディキンソンの生き方と重なる。そして、「見られること」もなく、個の自由と

尊厳を守りながら自然の中で自立して咲くフレノーの「ハニーサックル」や誰かのために咲くのではなく、存在そのものが美であるエマスの「ロドーラ」でもある。

「私の仕事は愛すること」「私の仕事はうたうこと」と言うディキンソンにおいて、「愛すること」は「うたうこと」つまり詩を書くことであり、「永遠」を「生きる」ことに他ならない。

〔注〕

本稿におけるディキンソンの詩は、*The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. 3 vols. Ed. Franklin, R. W., Cambridge, MA : Harvard UP, 1998. からの引用とし、Fと略す。Fのあとの数字は詩の番号を表す。Jのあとの数字はJonson版 (*The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. Ed. Johnson, Thomas H., Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1955.) の詩の番号を表す。また、手紙は Dickinson, Emily. *The Letter of Emily Dickinson*. 3 vols. Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA : The Belknap Press of Harvard UP, 1958. からの引用とし、Lと略す。Lのあとの数字は手紙の番号を表す。

本稿における詩と手紙の和訳はすべて筆者による。

- (1) マウント・ホリヨーク女子神学校（現在は女子大学）を退学して以来、父の家から外出することが少なくなったディキンソンにとって、手紙は大切な人たちと心を交わす重要な手段となる。「エミリオ・ディキンソン—宛先のない手紙」『英米文学語学研究会論集 (The EAS REVIEW)』第19号（英米文学語学研究会）、2021年、pp.31-33.
- (2) アメリカ独立宣言の起草者であるジェファソンは、人間の平等、生命と自由と幸福の追求などの原則に基づいたジェファソンの民主主義を提唱。
- (3) ハニーサックル 和名：スイカズラ（吸葛）、キンギンカ（金銀花）、ニンドウ（忍冬）スイカズラ科スイカズラ属の植物の総称。みつが多く芳香を放つ花をつける。
- (4) Freneau, Philip. *The Poems of Philip Freneau, Poet of the American Revolution Volume II (of III)* Long Road Classics, Collection. Independently published, 2022, pp.398-399. 和訳は筆者による。

- (5) ‘We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights, that among these are life, liberty and the pursuit of happiness.’ From Declaration of Independence : A Transcription (西田実『アメリカ文学史』成美堂, 1984年, p.16)
- (6) ニューイングランドでは1734年からジョナサン・エドワーズによる大覚醒運動(第1次)が起こり, アメリカ独立後の1790年には再び大覚醒運動(第2次)が起きている。「野生のハニーサックル」は第1次と第2次の大覚醒運動のあいだである1786年に創られた。
- (7) 「エミリー・ディキンソン—ニューイングランドの花」『中央学院大学現代教養論叢』第5巻1号, 2022年, pp.37-40.
- (8) ゼラニウム 和名: テンジクアオイ(天竺葵) フウロソウ科テンジクアオイ属(特に園芸上の)植物の総称。ピンク・青・白・赤などの皿状の花をつける。
- (9) フクシア 和名: ツリウキソウ(釣浮き草) アカバナ科フクシア属の低木または草本の総称。花は白・桃・紅紫など, 八重咲もある。
- (10) ディキンソンは, 人間以外のもの, 自然界の生物や様々な事象, あるいは抽象概念などを擬人化する。対象に接近し, その本質を理解しようとするとき, ディキンソンはしばしば擬人法を用いる。
- (11) フクシア (“Fuschzia’s”) J339, ゼラニウム (“Geraniums”) J339, J486, サボテン (“Cactus”) J339, カーネーション (“Carnations”) J339, J81, ヒヤシンス (“Hyacinth”) J339, J933, グローブローズ (“Globe Roses”) J339, 萼 (“Calyx”) J339, J606, J1241 (Rosenbaum, S. P., ed. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*. Ithaca and London : Cornell University Press, 1964.)
- (12) Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 2004, p.198. 和訳は筆者による。
- (13) ディキンソンは詩の中で「デイジー」 (“Daisy”) 16回, 複数形の (“Daisies”) 11回使用している。また, 手紙の中では, 「デイジー」 (“Daisy”) 14回, 複数形の (“Daisies”) 6回, 所有格の (“daisy’s”) 3回使用している。
- (14) 「エミリー・ディキンソン—宛先のない手紙」『英米文学語学研究会論集 (The EAS REVIEW)』第19号 (英米文学語学研究会), 2021年, pp.35-41.
- (15) *ibid.*, p.41.

〔文献リスト〕

- Dickinson, Emily. *Emily Dickinson's Poems : As She Preserved Them*. Ed. Miller, Cristanne. Cambridge, MA : The Belknap Press of Harvard UP, 2016.
- Dickinson, Emily. *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Ed. Johnson, Thomas H. Cambridge, MA : Harvard UP, 1955.
- Dickinson, Emily. *The Letter of Emily Dickinson*. 3 vols. Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA : The Belknap Press of Harvard UP, 1958.
- Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson : Variorum Edition*. 3 vols. Ed. Franklin, R. W. Cambridge, MA : Harvard UP, 1998.

〔参考文献〕

- Eberwein, Jane Donahue. ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport, Connecticut, London : Greenwood Press, 1998.
- Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 2004.
- Freneau, Philip. *The Poems of Philip Freneau, Poet of the American Revolution Volume II (of III)* Long Road Classics, Collection. Independently published, 2022, pp.398-399.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are laid Away in Books The Life of Emily Dickinson*. Random House, New York, 2001.
- Johnson, Thomas H. *Emily Dickinson : An Interpretive Biography*. Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1963
- Mackenzie, Cynthia. ed. *Concordance to the Letters of Emily Dickinson*. University Press of Colorado, 2000.
- McNeil, Helen. *Emily Dickinson*. London and New York : Virago-Pantheon, 1986.
- Rosenbaum, S. P. ed. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*. Ithaca and London : Cornell University Press, 1964.